

NO.81 2008

東 海 体 育 学 会 会 報

【 東 海 体 育 学 会 】

〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1 名古屋市立大学内
TEL/FAX.052-872-5839

〔ホームページ〕 <http://www.tspe.jp>
学会事務局 〔E-Mail〕 tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

東海体育学会の活性化にむかって

東海体育学会会長 穂 丸 武 臣

東海体育学会第55回大会は昨年の10月、東海学園大学で開催されました。環境に恵まれた大学キャンパスで、口頭発表・特別講演・シンポジウムなど多彩な企画があり、参加者も満足されたことと思います。実行委員長をはじめ関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

大会総会において私たち新執行部が選出され、すでに5ヶ月が経過しました。新体制下の理事会は、会長・理事の任期制導入などの選挙法改定による効果が現れていることを実感しています。理事会メンバーは、若い理事が加わり会議における発言は意欲的で発想の豊かさや行動力を肌で感じているところです。

さて、最近の新聞報道で体育・スポーツの研究者も無関心ではいられない問題がいくつかあります。後期高齢者医療問題は、その名称と保険料を年金から天引きする制度を含めて、国民の怒りをかっています。現在の高齢者は戦後、日本の復興と経済成長を支えてきた人々であり、東海体育学会においては、その礎を作られた先輩諸兄の年齢であります。

この制度が本当に高齢者の疾病予防や健康を守り、安心して生活できるシステムであるかどうか、抜本的に問いなおす必要があります。

また、東京オリンピックの誘致と道路整備目的で作られたガソリン暫定税率問題は税金の使い方に関して国民の関心を高めました。

今年の北京オリンピックには東海地区からも大勢の選手が出場し、最高のパフォーマンスを発揮していただけるものと期待しています。その一方で、聖火問題は、政治・人権問題とオリンピックという古くて新しい課題を突きつけています。

身近な課題としては、大学の制度改悪によって、教員と研究費の削減、任期制の導入など、教育・研究活動に対する厳しい状況が生まれています。これは、民間の経営手法や競争原理の導入によってもたらされたものですが、はたして、このような文教政策が本当に国民のた

めの教育政策といえるのでしょうか？

新執行部の課題は、大学における教育・研究条件が厳しい状況にあっても、学会を活性化させ、会員の教育・研究活動を支援するシステムを構築することにあります。

すでに、いくつかの改革案が実施に向けて動き出しています。今まで学会開催順の原則は東海4県で持ち回りでしたが、これからは、愛知県を4地域に分け、岐阜地域、三重地域、静岡地域、合計7地域でその負担を平等化し、学会開催をするというものです。この新原則でも、体育教員の少ない大学においては学会開催を承引することに躊躇されるかもしれませんが、学会担当理事と地域内の大学が共同で学会実行委員会組織を作るなどの工夫することによって、地域の教員間に共同と連帯が生まれ、その結果、研究交流推進などの効果が期待されます。

さらに、これからは共同研究活動を推進することが益々重要な課題となってきます。そのためには数年前から実施されている研究交流委員会の活動に注目しています。

研究交流委員会は現在13学問分野で構成されていますが、日本体育学会にはアダプテッド・スポーツ科学と介護福祉・健康づくり分科会が新設されましたので、研究交流委員会にも分野の追加をする必要があります。現在の交流委員会の各分野には数名の責任者が選任され、その運営をお願いするとともに研究交流が進むようにご尽力いただいています。このような研究交流委員会は全国的に例を見ない先駆的な試みといっても過言ではありません。研究費の削減によって若手研究者の研究条件が非常に厳しくなっている状況下では、同じ研究分野の人たちが情報交流から共同研究に発展させる試みは大いに期待されます。

最後に、学会の顔ともいえる学会誌の充実のために、会員による東海保健体育科学への投稿論文数を増すことは不可欠な課題です。それを支援するシステムも一層充実させ、皆様の期待に応えていきたいと思ひます。

企画委員会活動報告

企画委員会委員長 藤 井 勝 紀

平成18年度東海体育学会理事会における企画委員会では、過去2年間に実施されたセミナーのテーマ、「健康づくりの運動を科学する」を継承しつつ、平成18年度、19年度の企画内容の大きなテーマとして、「体育学・スポーツ科学のトピックを考える」を取り上げた。そして、平成18年度は講演会と東海体育学セミナーの2つを企画した。特に、7月の講演会としてのサブテーマは「中高年と登山-その神髄に迫る-」を掲げて、登山という究極的な生を求める活動から、現代人の忘れかけた人生観を再び考え直す機会が得られればと考えた。その中から、通常のスポーツ活動とはひと味違った、生を賭けた登山という活動の神髄を探りながら、体育学・スポーツ科学を見つめ直すことの重要性が問われた講演となった。講師は愛知学院大学の湯浅道男先生を招き、司会には名古屋学芸大学の正美智子先生にお願いした。講師のプロフィール、講演会の概要は後述した。

続いて12月に行われた東海体育学セミナーについて、サブテーマは「2006年ワールドカップサッカードイツ大会を検証する-敗因と未来-」を企画した。2006年6月、日本中をテレビの前に釘付けにしたワールドカップサッカードイツ大会であるが、前評判の割には日本サッカーは6月12日(月)、オーストラリアに1-3で敗北し、クロアチアに0-0の引き分け(6月18日、日曜)、ブラジルには1-4と完全敗北(6月22日、木曜)してしまった。様々に取り沙汰されているが、学会として専門的な立場からはっきりと検証する必要性を示したセミナーであった。講師はそれぞれの専門的な立場から、布目寛幸先生(名古屋大学)にはバイオメカニクスのアプローチ、松田保先生(びわこ成蹊スポーツ大学)にはユースサッカー指導の立場から、境田雅章先生(愛知学院大学)にはプロサッカー経験者としての立場からそれぞれ発表していただいた。司会者としては鶴原清志先生(三重大学)にお願いし、3名の講師の方の発表をまとめていただいた。講演会の概要は後述した。

1.2006年度東海体育学会講演会

テーマ:中高年と登山-その神髄に迫る-

講 師:湯浅 道男 先生(愛知学院大学教授)

司 会:正美智子先生(名古屋学芸大学教授)

開催日時:7月1日(土曜日)午後3時～5時

開催場所:愛知工業大学本山キャンパスにて

【概略】

本講演会は、最近マスコミ等で良く取り上げられている「登山」をテーマに、登山という究極的な生を求める活動から、通常のスポーツ活動とはひと味違った、正に現代人の忘れかけた人生観を再び考え直す機会が得られればという目的から、1973年に非常に困難とされる秋のエヴェレスト登攀に隊長として成功させた愛知学院大学教授の湯浅道男氏を講師に招き、氏の壮絶な登山経験を講演していただいた。講演内容の詳細は後日の公表に委ねますが、講演会の概略について少し紙面を割かせていただきます。

まず、湯浅氏の紹介にあたり、司会として湯浅氏を良く知り、女流登山家としても活躍している名古屋学芸大学教授の正美智子氏によって第一声が発せられた。氏のプロフィールは文末に示してありますが、正氏の紹介から思いがけない話が語られた。それは、井上靖の小説「氷壁」に登場する主人公、魚津恭太のモデルとなった奥山章氏は湯浅氏の先輩であるという話である。しかも1973年のエヴェレスト登攀にはその奥山章氏が隊長として行く予定であったが、顎ガンで自殺したために湯浅氏が抜擢されたというエピソードが紹介された。「氷壁」は、今年の1月にNHKで4回にわたって放映されており、時代背景は異なるが、正に、「氷壁」を読んでいる者にとっては、この講演会は物語の始まりである。湯浅氏の語り口は、とてもエヴェレストを踏破した壮絶なまでの厳しさを生き抜いた登山家とは思えないほど、さらりとした口調で淡々と話された。まさに自然体でエヴェレストに行って帰ってきたという感じである。ここ2年間半は本務校の法科大学院設置のために忙しく、山に行っていないことを悔しそうに話された。話の中で、何度かテーマについて触れながら、若者も中高年も変わらないことを指摘され、気のあった信頼に足るパートナーを見つけることが重要であることを訴えられた。

ところで、話の節々に龍太郎という名前が出てきて、良く聞いてみれば元首相の橋本龍太郎氏のことである。

実は、湯浅氏は「たかが山登りされど山登り」(成文堂)という本を書かれているが、この本の序文を橋本龍太郎氏が飾っている。元首相との出会いは1973年の秋にエヴェレスト南西壁登山隊の総隊長が橋本龍太郎氏、その登攀隊長が湯浅氏という縁になっていたようである。登山はお金が掛かるものである。ただエヴェレストに登るのではない。登るまでの準備、さまざまな苦難を乗り越えてやっとエヴェレスト登攀の緒につくのである。そして、エヴェレストに登って帰ってきましたとさりと話し終えられた。正に自然体の登山、湯浅氏のお人柄が伺える講演であったように感じられた。

<湯浅氏のプロフィール>

1937年に生まれる。

早稲田大学第一法学部卒業、大学院修士課程を経て1964年4月より愛知学院大学法学部助手

同講師、助教授を経て、1976年より教授。1987年法学博士(神戸大学)取得。

法学部長、学生部長、大学院法学研究科長を歴任。

2005年4月より法務研究科長。

<登山家としてのプロフィール>

18歳から登山に没頭する。1973年、非常に困難とされる秋のエベレスト登攀に隊長として成功させる。

以後これを含めて3度エベレスト登山隊長を務める。

愛知県山岳連盟会長、日本山岳協会理事、日本山岳ガイド協会副会長を務めている。

2.2006年度東海体育学研究セミナー

テーマ:2006年ワールドカップサッカードイツ大会を検証する ―敗因と未来―

講師:布目寛幸先生(名古屋大学)

松田保先生(びわこ成蹊スポーツ大学)

境田雅章先生(愛知学院大学)

司会:鶴原清志先生(三重大学)

開催日時:12月16日(土曜日)午後2時~4時30分

開催場所:愛知工業大学本山キャンパスにて

【概略】

本セミナー開催に際して、本年度開催された2006年ワールドカップサッカードイツ大会は日本中をテレビの前に釘付けにしたワールド大会であったが、前評判の割には日本サッカーは6月12日(月)、オーストラリアに1-3で敗北し、クロアチアに0-0の引き分け(6月18日、日曜)、ブラ

ジルには1-4と完全敗北(6月22日、木曜)してしまった。様々に取り沙汰されているが、学会として専門的な立場からはっきりと検証する必要があるのではないかと思ひ、このような企画が考えられた。

先ず、司会の鶴原先生から本セミナー開催の趣旨が説明され、続いて講師の先生方のプロフィールが簡単に紹介された。最初に登壇されたのはびわこ成蹊スポーツ大学の松田先生である。氏はユースサッカーにおいては第1人者の指導者であり、プロサッカー選手の井原選手を育てた人でもある。氏は先ず、ワールドカップサッカーの歴史について簡単に触れられ、日本がフランス大会から今回で3回目の出場であることを強調された。話が進むうちに、本テーマの敗因についてジーコ監督(松田先生のジーコ評は長島茂雄氏に例えられた)の采配はさておき、最も重要な初戦のオーストラリア戦に対して楽観しすぎた点にあること、つまり、戦略的にあまりにも丸裸の日本チームを相手に露呈させた点であることを説明された。我々聞き手はなるほどと納得した。さらに松田先生は、新しいオシム監督についても話が及び、カードゲームが強く、日本びいきで、走るサッカーを提唱するオシム監督は、日本人としてのアイデンティティを誇れるサッカーを目指すことができるのではないかと結ばれた。これは松田先生も目指している指導体系の神髄と思われる。

次に、愛知学院大学の境田先生が登壇され、氏は現在の横浜マリノスの前衛である日産自動車サッカー部でプロとして活躍され、その後、名古屋グランパスエイトの強化担当推進部長として活躍され、多くの有名な国内、国外のプロ選手との交渉や監督との接点に力を注いできましたが、現在は母校である愛知学院大学の教員としてサッカー部の指導をされています。今回のワールドカップサッカードイツ大会の日本の敗因は、やはり重要な初戦のオーストラリア戦を勝てると踏んだ侮りであり、大会前のドイツとの試合に2-2での引き分けた奢り、さらに初戦に対するコンディショニングの失敗を挙げられた。そして世界に通用するフィジカル、タフさを高めること、つまり走りまくるサッカーをし、したたかな判断力を持たなければ世界には通用しない点を強調された。

最後に名古屋大学の布目先生が登壇され、氏は名古屋大学でバイオメカニクス分野の研究に従事され多くの論文を発表されている。もちろん名古屋大学サッカー部の顧問でもあります。実は、氏の今回の内容は、体育の科学(Vol.56, p819-825, 2006)に掲載された内容を分かりやすく、さらに肉付けされて話された。今回の

ワールドカップサッカードイツ大会ではミドルシュートの得点が多かったことを冒頭で説明され、そのミドルシュートについてバイオメカニクスの的にアプローチされた成果を話された。まず、ボールに回転のないミドルシュートを蹴ると、空気抵抗による影響で予測できない挙動を生み出し、それがキーパーを翻弄する結果となり得点に結びつくという構図である。一見キーパーのミスに思えるようなボールであるが、実際ビデオで説明されるとボールの変化がよく分かり、なるほどと思われた。そして、実はこの原因が新しいボールになってから良く起きるようになったことも補足された。さらにはこのような回転のないフラットなボールを蹴るメカニズムまで説明され、その指導法まで言及された。特に、後ろで聞いていた学生達には非常に受けていた。

3名の講師の方の話が終わり、司会の鶴原先生からフロアの方に対して質疑応答が求められた。3名の講師の方に満遍なく質問がなされ、最後に本セミナーのまとめとして、司会者自身がマスコミに踊らされた1人であるが、学会として今回のワールドカップサッカードイツ大会の敗因と将来的な展望を検証できたことは有意義であった点を述べられて幕を閉じた。

以上、平成18年度は7月の講演会と12月の東海体育学セミナーの概要を認めた。平成19年度は6月に講演会を開催予定である。

3.東海発育発達・測定評価分科会活動報告

平成18年度、東海発育発達測定評価分科会企画研究会について

日本発育発達学会では、昨年度より学会の活性化に向けて、月に1度の研究会を開催することになり、月例会と称してスタートしました。しかし、地方の方の参加はなかなか難しいので、そのような点を考慮して地方で分担して開催する方向が打ち出されました。そこで、日本発育発達学会第2回大会を東海地方で行った経緯から、東海地方で最初に地方月例研究会を開催することになりました。この地方月例会は昨年の研究会をさらに発展

させた内容になっています。以下にその要領を示します。

内容:日本発育発達学会第1回東海地方月例会

日時:平成18年6月3日(土曜日)、午後2時～5時

場所:愛知工業大学本山キャンパス 1F多目的室

演題1:「発育発達と数学関数の接点」

演者:藤井勝紀(愛知工業大学)

演題2:「推定脂肪量の初経発来臨界期に関する検証」

演者:小栗和雄(静岡産業大学)

演題3:「小・中学サッカー少年団、大学生アメフト選手
の大腿筋量・筋力の比較」

演者:館俊樹(静岡県総合保健センター)

特に、今回の内容は東海体育学会を見据えて発表してもらいました。

内容:日本発育発達学会第2回東海地方月例会

日時:平成18年10月28日(土曜日)、午後5時～7時

場所:愛知工業大学本山キャンパス 1F多目的室

演題1:「中学生男子の体格の違いと体力指標との関連」

演者:朝内大輔(南山大学付属中学・高校男子部)

演題2:「幼児の身体組成および骨密度(SOS値)の加
齢変化と身体組成間の関係」

演者:境田雅章(愛知学院大学)

東海体育学会を控えて最終的な検討を行い、発表内容をさらに充実しました。

以上の地方月例会を踏まえて、平成19年3月17日(土曜日)、18日(日曜日)に日本発育発達学会が開催され、以上発表された先生方を初め、東海発育発達測定評価分科会の先生方、石垣享先生(愛知県立芸術大学)、酒井俊郎先生(浜松学院大学)、斎藤由美先生(名古屋造形芸術大学)、田中望先生(中京女子大学)等が発表されました。特に、酒井俊郎先生は優秀発表に選ばれました。さらに、今年度も東海地方月例会を企画し、6月には開催予定です。

編集委員会活動報告

編集委員長 石 田 浩 司

- 1.「東海保健体育科学(第29巻)」の総説執筆者として、バイオメカニクスが専門の桜井伸二先生(中京大学)を編集員会で選考し、理事会に推挙し承認を得た。
- 2.機関誌のWEB化及び著作権の問題について継続的に審議し、「来年度から機関誌のWEB化と著作権を学会に帰属する方向で進める」ことを東海体育学会総会で承認された。
- 3.東海体育学会大会開催時に、企画委員4名と編集委員5名からなる「東海体育学会学術奨励賞」選考委員会を開催し、平成19年度東海体育学会学術奨励賞の受賞候補者2名を選考した。
- 4.「東海保健体育科学(第29巻)」を平成19年12月25日に発行した。掲載内容は総説1編、原著論文3編(うち2編は学術奨励賞論文)、事例報告1編、実践研究1編、特別講演1編の計7編であった。

広報委員会活動報告

広報委員長 来 田 享 子

- 2007年度の広報委員会では、以下の2項目について活動を行った。
1. ホームページの更新作業効率化をめざして2006年度より継続していた、ブログ形式への移行を完了させた。移行作業の完了にともない、2008年度理事会からこれを使用できる体制となった。(新規URLは <http://www.tspe.jp>)
 2. 東海体育学会会報第80号を2007年6月に刊行した。刊行にあたり、原稿執筆の労をおとりいただいた会員等関係者各位、印刷費の援助をいただいた株式会社ミニミニ様に、感謝いたします。

大会実行委員会活動報告

学会大会委員長 小 林 培 男

2007年度の学会大会委員会の活動報告をします。今年度も学会大会委員会のメインの事業は、東海体育学会の企画と運営でありました。一昨年夏に第55回東海体育学会大会を東海学園大学にお願いして、学会大会実行委員会を形成していただき、大会事務局長の森氏(東海学園大学)を新たに学会大会委員会所属の理事としてお招きして、大会の企画運営を年明けから進めてまいりました。

大会実行委員会は昨年の岐阜聖徳大学大会を踏襲し、東海学園大学所属会員を中心に近隣の所属会員も加わっていただいて合計13名の構成で準備をしていただきました。学会大会におきまして広域実行委員会組織が形成され、運営すると言う学会大会委員会が目指した一つの形が浸透してきたと思っています。

2007学会大会は、参加した会員、大会役員および学生補助員みんなで一同に昼食を戴くと言う、それも豪華でふんだんなこれまでに無い企画が実行されました。食事やドリンクを戴きながら、研究グループ同士の打ち合わせや会員相互で親睦と交流が深まったと確信しています。参加されました百数十名の会員と実行委員会・補助員の役員の皆様に心からねぎらいの言葉を送ります、ありがとうございました。

もう一つの学会大会委員の大きな業務は、一昨年から課題でありました学会大会活性化検討案を纏め上げることでありました。およそ1年かけて学会大会委員会での検討を重ね、3回に及ぶ理事会での審議を戴きまして、学会大会の開催方式の見直しや学会大会参加者拡大および発表演題数増加の課題に答えるための学

会大会活性化検討案を確定しました。会員のニーズに迫るために若手研究奨励、ポスター発表や体育スポーツ実践・教育指導を含むワークショップの企画など出来るところから、活性化に向けて取り組みます。

新年度から新しい理事を迎えた学会大会委員会と

なりますが改革検討課題を引き継ぎ、会員の皆様の強力なご支援をいただいて、一人でも多くの会員の学会大会へのご参加という最大の目標に向けて現状に満足することなく改革を進め、企画業務しますので、一層のご協力をお願いします。

第55回東海体育学会を終えて

学会実行委員長 星川 保（東海学園大学）

第55回東海体育学会を平成19年10月20日、東海学園大学三好キャンパスにおいて開催し、所管校としての責務を果たすことができました。研究発表者、特別講演を快くお引き受けくださった宮下東大名誉教授、シンポジストの皆さん、学会に参加し会を盛り上げてくださった会員の皆様に心より御礼を申し上げます。

実行委員会の総括はまだ行っていないので委員長の個人的見解であることを付記し、大会の概要と感想を述べさせていただきます。

- 1.出席名簿記載者数:92名
- 2.発表演題数:14題(体育史:1題、体育管理:1題、発育・発達:3題、運動生理:1題、バイオメカニクス:6題、測定・評価:2題)
- 3.特別講演:「体育・スポーツの専門知とその活用」
宮下充正（東京大学名誉教授）
- 4.シンポジウム:「スポーツ・体育における専門知・スキルの育成とその活用」

司会 豊島進太郎（東海学園大学人間科学部学部長）

シンポジスト:松葉昌泰（東海学園大学人間健康学部）

福地和夫（岐阜経済大学スポーツ経営学科）

菊本智之（常葉学園浜松大学心身マネジメント学科）

大沢 功（愛知学院大学健康学科）

山本 親（名古屋学院大学人間健康学科）

指定発言 北川 薫（中京大学学長）

学会大会参加者と研究発表者数について

出席者名簿記載者数は92名で、これは平成20年1月1日発行の日本体育学会東海支部会員437名の約21%です。また、発表演題の14題も学会員数からみると低調といわざるを得ません。当然のことながら研究の質、水

準によってその発表の場に国際学会→全国学会→地方学会の序列性のある事はいなめない事実です。55年前とは研究情報交換の状況が大きく変わってきている今日、年中行事化した地方学会大会開催についてその意義と役割を再検討する必要があるのではないかと思います。

特別講演について

テーマ指定でお願いした特別講演に宮下氏は強い関心をもたれ、講演内容を全国の体育・スポーツ関係者にも知ってもらいたいと講演原稿を雑誌「体育の科学」に投稿したとの連絡を学会後に受けました。大会に参加されなかった人で興味のある方は「体育の科学、58巻、59頁、論壇」をお読みください。

シンポジウムについて

大会挨拶文にも書きましたが、本シンポジウム企画のコンセプトは、貨幣価値に置き換えられる、ありきたりの言い方をすれば「金の稼げる」専門知・専門スキルをどのように育て、どのように活用する職域を作っていくかを考えてみようということでした。そして、今や、スポーツ指導者育成高等教育機関として全国的大手の中京大学を始め、近年、スポーツ関連学科を発足させた大学にシンポジストとして提言をしていただきました。

結論的にいえば、時間的制約もあって発言は各大学のカリキュラム紹介の域を出ず、生煮えの感じで核心に迫ることができなかったというのが率直な感想ですが、これは地方大会で取り扱う範囲をはるかに超えた、本来、日本体育学会が行うべき課題を先取りしたフライングが原因であったためかも知れません。シンポジストの皆様には無理難題を強要したことをお詫びいたします。

東海体育学会第55回大会傍聴記

東海学園大学での第55回学会大会に参加して

学会大会委員会委員長 小 林 培 男

2007年度第55回東海学会大会が名古屋市内からも苦にならない時間と距離の西三河三好の丘陵地に広がる東海学園大学三好キャンパスにおきまして、11月24日土曜日に盛大かつ有意義に開催されました。このコラムは、広く会員の皆様に本東海体育学会のメインとなる研究事業である学会大会を「学会大会傍聴記」と題して会報紙面でお伝えしようとする初めての試みであります。

本大会は大きく次の企画で構成され、進められました。午前中の3会場での分野別一般研究報告、昼食交流企画や理事会、分野別ミーティングなど諸会議を挟んで、午後から総会と特別講演・シンポジウムがありました。プログラムが全会員に配布されていますので、この傍聴記では一般研究報告の質疑応答を中心に大会の流れに沿って大まかにお伝えします。

一般研究報告のA会場では5演題が発表された。体育史関係による曾我芳枝先生の「舞楽に関する一考察-クララの明治日記に見る舞楽-」が発表され、あまり普段では聞き慣れない舞楽について興味ある内容が話された。舞楽とは雅楽を伴う舞踊のことで、舞はその作られた国と伝来の経路によって、左舞(左の舞)と右舞(右の舞)に分けられ、またそれぞれが舞振り、装束等の違いによって文舞・武舞・走舞・童舞・人長舞などに分類されると言う。質疑応答ではフロアから舞楽に対する外国人と日本人の感じ方の違い等はどうなのかというような質疑が成された。2演題目の発表は、周強先生の「中国のフィットネスクラブにおけるサービス品質評価に関する研究」である。周先生の上手な日本語が響き渡り、中国でも上海、広州のフィットネスクラブにおけるサービス品質に関して因子分析が適用され、サービス品質の評価を提案するべく仮説モデルの検討が成された発表であった。フロアからモデルの適用は中国全体に適用できるものなのかという本質的な質疑がだされた。現在の中国を考えればモデルの適用が妥当かどうかは今後の研究課題と言えるのではないだろうか。3演題目の発表は、吉田和人先生の「幼児期における聴覚刺激に対する

同期能力の発達」で、幼児の年少から年長までにメロノームに会わせて手を打叩させる動作を行わせ、どの程度そのメロノームの音と一致するかを判断したもので、ユニークな内容といえる。フロアからはその同期能力の発達は正にスキヤモンの神経型発育パターンではないかという意見が出て、会場の皆さんはなるほどと唸っていたようだ。4演題目の発表は、朝内大輔先生の「中学新入生の誕生時期と形態、体組成および体力との関係」で、現場で指導していると4月、5月生まれの子と早生まれ(1月、2月、3月生まれ)の子では早生まれの子の方が体育場面で不利になることが多いことを実際のデータで示した内容であった。つまり、運動能力において早生まれのこの方が劣るのである。現場で指導されている先生らしい発表であった。フロアから思春期に突入する時期であり、成熟度との関連はどうかという質問に対して、現在解析をおこなっている最中であるという積極的な回答であった。5演題目最後の発表は、田中望先生の「男子中学生における形態的質の違いによる体力評価チャートの試案」で、最後を飾るに相応しい発表内容であった。肥満傾向の者は体力・運動能力が劣るという一見常識的な知見であるが、しかし、そのことを明確に示した論文はあまりないのである。その点に着眼し、体脂肪と体力・運動能力の関係を解析し、さらに体型の割には脂肪を多く付けている者、少ない者を判定しその体力・運動能力を検討するための評価試案を提供した発表である。フロアからは専門的に方法論的な質疑がなされ、評価チャートの構築における最小二乗近似多項式の次数決定に関わる内容が論議され、大変有意義な質疑応答となった一般研究報告であった。

B会場ではバイオメカニクス4件、測定評価1件の発表があった。バイオメカニクスでは上越教育大学の三浦雅季先生と名古屋大学大学院の粕谷陽佑先生がバランストレーニングに関する発表を行った。近年、バランスボールによるトレーニングが一般化してきてはいるが、その効果や機序は必ずしも明確ではないとの印象を受けた。国立スポーツ科学センターの神事務先生は打球時の

手首の関節トルクに関する発表をした。ボールと指との力の作用点やボールを回転させるトルクが手首のトルクに与える影響など解明しなければならない問題はあるものの、スナップ動作の運動力学的効果を究明する興味深い内容であった。特殊スポーツ研究所の金謙樹先生は下腿切断患者が義足歩行を開始したときから3ヶ月間の股関節屈曲力と歩容の変化を調べた貴重なデータの発表であった。測定評価では、あいち健康の森健康科学総合センターの山本薫先生がトレーニングの目標値としてトレーニング時の重量×回数×セット数をボリュームと定義する方法の提案があった。いずれの発表にもフロアから多くの質問があり、活発な議論が繰り広げられた。

C会場の演題は、バイオメカニクス3題と運動生理1演題であった。発表演題のいずれもオリジナリティーがあり評価できる内容であった。4題とも質疑応答が活発になされたが、特に大桑氏の乳酸の測定方法については将来への発展性が期待されるものであった。



写真1:午前中の一般研究報告



写真2:初めての企画、昼食交流の様子

発表会場から場所を移してこれまた立派な厚生食堂施設の中でバイキングパーティ料理の豪華な昼食を戴きながら参加会員相互の研究教育の交流と親睦が一層深まった通常大会では初めての画期的な企画であった。事業報告と計画、予算決算、会長選挙や理事選出選挙を滞りなく終えて、この学会とご縁の深い宮下充正氏による特別講演が行われた。宮下氏は、長年の体育科学の研究のまとめに加え21世紀に向けた課題もご趣味である「釣り」報告と共に熱く話された。そして体育・スポーツ教育機関の現状と課題を中心にシンポジウムが開催された。各シンポジストの発表時間がやや短い感じがしたが、教師や指導者養成機関の現状と課題が浮き彫りになるシンポジウムとなった。

この学会大会見聞録は、A会場座長:藤井勝紀氏(愛知工業大学)、B会場座長:岡本敦氏(東海学園大学)、C会場座長山本親氏(名古屋学院大学)の諸氏からの座長見聞録をそのまま引用させていただきました。早朝からご準備いただきました実行委員会の皆様に感謝申し上げますと共に話題提供いただきました報告者の皆様、これに参加いただいた聴衆の皆様、活発な討議をまとめていただきました3会場の座長および大会協賛などこの大会に関わった全ての皆様にお礼も申し上げます。次回第56回学会大会は三重大大学を中心とした開催であります。ご意見やご審議いただいた学会大会改革検討方針に沿って出来ることから始める精神で学会大会を企画運営してまいりたいと思いますので、会員の皆様の一層のご支援とご協力をお願いします。

東海体育学会第56回大会のご案内

第56回実行委員長挨拶

実行委員長 脇 田 裕 久（三重大学）

この度、東海体育学会第56回大会を三重大学でお引き受けすることになりました。お引き受けが決まった後に、教育学部一号館と共通教育棟が耐震工事（8月～3月）を行うことが決まってしまう、大会当日の10月26日は会員の皆様に大変ご迷惑をお掛けすることになると思います。ご容赦のほどよろしくお願いします。

本大会は、三重大学講堂の三翠ホールを会場とします。翠はみどり色であり、青々とした様子を表します。三翠は、三重大学を囲む空のみどり、山のみどり、海のみどりのことで、この美しい環境で勉学することを意味します。

本大会の一般研究発表は、口頭発表とポスター発表の二本立てを考えています。多数の演題申込をお待ちしていますのでよろしくお願いします。また、パネルディスカッションは、8月に北京オリンピックが開催されますことから、オリンピックに関する話題に取り上げます。北京オリンピックについては、政治問題が絡み、聖火リレーがまともに行えない状況が報道され、今後の成り行きが注目されることです。なお、このパネルディスカッション企画は、市民に一般公開とします。詳細は、これから学会担当理事と協議しながらきかしくしていきますので、当日をお楽しみにお待ちいただければと思います。なお、東海体育学会第56回大会要項については、東海体育学会ホームページで公開しておりますので、一度ご覧ください。

先の東海体育学会第48回大会が三重大学で開催されてから9年を経て再び会員の皆様をお迎えすることになりました。本大会の一般研究発表、パネルディスカッションを通して、体育科学・スポーツ科学の一層の発展を期し、多数の会員の皆様および市民の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

東海体育学会大会開催概要

【期日】

平成20年10月26日（日曜日）受付午前9時、研究発表 午前9時30分開始

【会場】

三重大学 講堂小ホール

【内容】

研究発表・総会・パネルディスカッション

【事務局】

東海体育学会第56回大会事務局（事務局長 鶴原清志）

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577三重大学教育学部保健体育教室内

学会ホームページURL <http://tspe.sakura.ne.jp/>

電話・ファックス 059-231-9291

電子メールアドレス 56th-tspe@umin.ac.jp

【講演会開催】

2008年度 東海体育学会講演会のご案内

東海体育学会企画委員会

大学全入時代が取りざたされているさなか、体育系大学・学部の新設、スポーツ系学科の増設が全国的に展開され、体育・スポーツ界にとって好機が訪れてきたように感じられます。しかし、この動向の実情はどのようなのでしょうか。また、大学におけるこのような動きが、日本の体育・スポーツ界にとってどのような影響をもたらすかなどを、大学経営陣のトップに就任された体育界の重鎮に講演をしていただきます。我々大学教育に携わる者をはじめ、現在大学や大学院で学ぶ学生諸子、これから体育・スポーツ界へ生徒を進学させる高校の進路関係の先生方、体育・スポーツ界の動向に興味関心のある一般市民の方などに聴講いただき、日本の体育・スポーツ界の現状と今後の行く末を考える機会にしたいと思います。さらに、東海体育学会の活性化と発展のためには、この大学の動向を踏まえ、学会としていかなる取組みを展開すべきかを考える機会にもしたいと考えています。

つきましては、下記日程で講演会を開催します。学会員をはじめ、多くの方々のご参集をお願いします。

記

1. テーマ

日本の体育・スポーツ系大学・学部事情

2. 講 師

北 川 薫 先生(中京大学学長)

3. 開催日時

2008年6月21日(土曜日)

午後2時30分～4時30分(受付 午後2時開始)

4. 会 場

中京大学名古屋キャンパス ヤマテホール(センタービル2F)

〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2

<キャンパス案内> <http://www.chukyo-u.ac.jp/koho/gaiyo/map/map.html>

<交通アクセス> <http://www.chukyo-u.ac.jp/koho/gaiyo/map/kotu-n.html>をご参照ください。

〔注〕公共交通機関をご利用いただき、お車での来学はご遠慮ください。

学術奨励賞を受賞して

田 中 望（愛知工業大学非常勤講師）

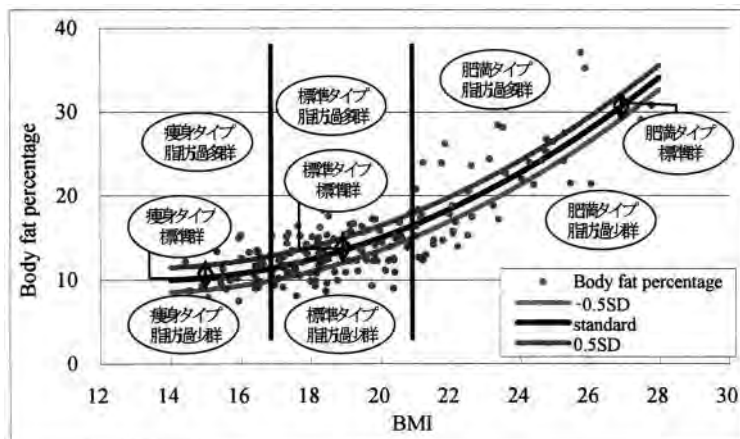
この度は、東海体育学会学術奨励賞を頂きありがとうございました。昨年の10月に東海学園大学で開催された第55回東海体育学会大会では緊張しながら発表したことを思い出します。

今回の研究は、男子中学生の形態的な質の違いが体力・運動能力にどのように影響しているのかを明らかにすることが目的でした。これまでに、身体組成と体力・運動能力との関係を調べ、体脂肪量や体脂肪率は持久系能力や敏捷性、走能力、跳能力に対してネガティブな要因となることを明らかにしてきました。このような結果を踏まえながら今回は、形態的な質の違い、つまり身体の中味の違いに着目し、体型の違い、さらに同じ体型でも脂肪の蓄積の度合いの違いにより体力や運動能力も違ってくるのではないかと考え、それらの検証を試みました。今回の研究では、BMIに対する体脂肪の評価チャートを構築することが1つのポイントとなります。この評価チャートは個々の被験者がBMIの割に体脂肪が多いか少ないかもしくは標準的であるのかを調べるものであり、形態的な質を評価するためのものです。学会の発表では、BMIに対する体脂肪量の回帰評価チャートについていくつかの試案を報告させていただきました。学会での発表の後、さらに形態的な質の違いという面で体脂肪率にも着目して評価チャートの構築を行い、図の説明のように被験者をBMIをもとにさらに詳細にグループを分類して体力・運動能力の比較検討を行いました。その結果を論文に報告させていただいておりますが、形態的な質の違いによる体力・運動能力は、全体的な傾向としてやはり同じ体型でも体脂肪の蓄積が多いと体力・



運動能力は劣る傾向がみられました。また、身体の構成では、脂肪蓄積が多いほど筋肉量が少ないという構図もみえてきました。子どもたちの体力低下が問題視されて久しいですが、子どもの身体活動量の少なさ、運動経験の少なさといったことが今回の結果にも表れているのではないかと思います。今後も子どもの身体と体力・運動能力の関係を検討し、これらの問題に対して少しでも情報の提供ができればと考えております。

最後になりましたが、私にとりましてはこのような受賞は大変名誉なことです。私が発育発達分野に興味を持ち、研究に関わり始めてからまだまだ年月は浅く、いつも東海体育学会の発育発達・測定評価分科会の先生方からいろいろなことを学ばせていただき、ご指導をいただいていることで研究に関わることができ、続けることができています。日頃の研究、学会での発表から論文の作成に至るまでご指導くださり支えてくださった先生方に心より感謝申し上げます。



国際情報 I

アメリカでの長期海外研修を終えて

島 岡 み ど り（名古屋大学 総合保健体育科学センター）

私は、平成19年4月から20年3月までの1年間、日本を離れて、マサチューセッツ大学アマーست校 (University of Massachusetts Amherst) のキネシオロジー学部に特別研究員として在籍しました。マサチューセッツ大学 (UMASSと省略します) は、米国北東部マサチューセッツ州の州立大学で、キャンパスは4ヶ所に分かれています。私のいたアマーストは、東海岸の州都ボストンから高速道路で約1時間半西方の内陸部にあり、大都会から見ればリゾート地の趣をもった静かな土地柄です。アマースト校キャンパスはUMASSの中で最大の広さを持っており、日本でいう学部の数も最も多くあります。日本人には、あの 'Boys, Be Ambitious' (青年よ、大志をいだけ) で有名なクラーク博士の出身校といったほうが馴染みがあるかもしれません。広大なキャンパス内は夜になって人気なくなると怖いくらいですが、要所に緊急用の押しボタンのあるポストが立てられていて助けを呼べるようになっています(写真1)。この広さのため、周辺部も含めて移動手段として無料バスが運行されていますが、本数が少ないためやはり自家用車は必需品でした。

UMASSのキネシオロジー学部は6つの研究室で構成されており、私が在籍した筋生理学・筋撮像研究室の他にスポーツバイオメカニクス、スポーツ栄養学、運動生理学、体力・ウェルネス、運動コントロールの各研究室があります。筋生理学・筋撮像研究室の主任教授はPriscilla Clarkson教授といい、当時6人の院生(博士課程4名、修士課程2名)と2名の学部生を指導していました。このほか、生物学の授業担当のPost doctor やLab technicianの職員、外部委託研究のための3名の研究職員などを含めると、総勢10数名が常時研究室に出入りしていました。(写真2)

Clarkson教授は、American College of Sports Medicine (ACSM) の会長や副会長を勤めた経験のある方で、国の健康関連基金や外部資金から今までトータル4億円相当の研究サポートを

受けているとのことでした。一方、外部委託研究のために3名の研究職員を雇っていたように、研究費のかなりの部分は人件費や被験者謝金にあてられており、これはUMASSに限らず、近隣の有名私立大学のスミスカレッジでも同様とのことでした。その一方では、研究設備等は、州立大学の資金不足もあり、名古屋大学と同程度のように見えました。

キネシオロジー学部のPost doctorの職員は、日本でいう任期制の研究助手と類似しており、どこの研究室にも1名は在籍していたようです。知り合いになったUMASSの別の学部にいるPost doctorの30代前半の日本人は、日本で某独立法人国立の助手をしていた時より給料が良かったと言っていました。全体的に見て、大学としても世界中から集まってきたたくさんの若いPost doctorに働いてもらわないと、教育・研究がうまく進んでいかないうような状況に思われました。

筋生理学・筋撮像研究室では、不活動性筋萎縮や過度なトレーニングによる筋障害を含む、筋の萎縮や筋肥大などの研究課題や、他の会社や研究所との間の共同プロジェクト課題に取り組んでいました。例えば、筋痛に対してのジェル状塗り薬や飲料水の効果の調査やメタボリックシンドロームと高血糖症についての研究がありました。骨格筋の委縮・肥大の研究では、主にエキセントリックトレーニング前後の被験者の血液サンプルから、PCR(合成酵素連鎖反応)を利用した遺伝子工学技術によってDNAの多型を分類し、委縮・肥大との関連を研究していました。私は、筋痛と塗り薬の実験や、メタボリック症候群と糖代謝研究における最大酸素摂取量測定などに携わりました。久々の測定でしたが、名大に勤め始めた頃を思い出し、院生達の手伝いをしました。ヒト相手と言うことも理由かと思いますが、土曜・日曜問わず測定が組まれており、私は土曜日の測定を数多く任されました。この研究のために、ドクターコースの院生に採血法をあらためて教わったりしましたが、このような場合、必ず事前に倫理委員会主催の教育研修を受け、認定

試験にパスしなければなりません(認定証明書がでます)。それに加えて、環境健康・安全委員会の主催するバイオ・セイフティ研修会(実験にあたっての感染予防の知識について)にも出席する必要があります。これらの研修は、ヒトに対しての研究態度や知識についてかなりきちんと教育する機会を与えるものとなり、特に経験の浅い研究者に参考になると思われました。これらの認定証明書を受けると、被験者の同意があれば、医療関連職員でなくても単独で採血やDNA診断も可能になります。

この倫理委員会主催の教育研修の認定書は、後になってとても役立ちました。というのは、自分が企画していた福祉医療関係職員に対するアンケート調査研究に関して、ようやく帰国間際になって実施の目途がたち、その計画に関して倫理委員会に審査申請書類と研修認定書を提出しなければならなかったからです。ヒトを対象とする研究は、たとえアンケートであっても、この倫理委員会主催の研修認定証が必要なのです。現在、審査結果待ちの状態ですが、承認され次第、現地の共同研究者と調査を開始できるよう準備をしているところです。

文字どおりの、あっという間のアメリカ滞在でしたが、スポーツ科学分野の広がりや深まりを再認識する1年でありました。



写真1:中央のランプのついている背の低い柱が緊急連絡用ポスト。後ろの高い建物は、図書館。



写真2:研究室スタッフ。前列左端がClarkson教授。(最前列の赤ちゃんを抱いている院生の隣が筆者)

国際情報 II

ケルンスポーツ大学 (ドイツ連邦共和国) における研究生生活・家族での生活

富岡 徹 (名城大学)

私は、2006年度の名城大学長期支給在外研究員の立場を得、Deutsche Sporthochschule Köln (ケルンスポーツ大学) を拠点として生活した。ケルンに滞在するのは、学生時代に交換留学生として籍を置いて以来、2度目である。

本稿では、自身のテーマについて若干紹介させて頂くほか、ケルンスポーツ大学についての紹介とドイツ人の日常生活とスポーツについて経験談的に御紹介させて頂く。

1. ノルディックウォーキング

研究テーマは『ドイツ連邦共和国におけるノルディックウォーキングの理論と実際』であった。ノルディックウォーキングは、ストックを持ってウォーキングするもので、近年我が国でも知られるようになってきたウォーキング方法である。詳細については拙書 (翻訳書:『ストックを持って歩こう ウォーキング・ノルディックウォーキング・ノルディックプレーディング』(三恵社)) をご参照頂ければ幸いである。ストックを介して上肢を運動に動員することによって、RPEが高まることなくエネルギー消費量が2割程度増加するとされている。ドイツにおいては150冊以上の図書が発刊され、300万人程度の愛好者が見積もられる規模的には世界一の普及国である。死因第一位の心臓病の予防としてノルディックウォーキングは注目され、健康保険会社は医療費削減などの観点からその普及に力を注いでいる。例えば週1回10週間の初心者講習会は、参加費の8割から全てを保険会社が負担するなどに至っている。その普及の背景などの研究 (調査) 結果は拙論 (ウォーキング研究No.11、名城論叢8(4)) をご拝読賜り、ご批評頂ければ幸いである。



ノルディックウォーキング

2. ケルンスポーツ大学

ケルンスポーツ大学は、ヨーロッパ随一のスポーツ専門の単科大学で、学生数は6000名を上回っている。入学には大学入学資格に加えて厳格な実技試験が行われる。全般的な体力と技能を検査する試験で、各種目に基準点があり、二種目が基準に達しないと不合格となる。2005年度は受験生約2000人に対して合格者はおよそ半数の1000人であった。学生は外国人がおよそ1割を占め、世界中から集まっているようである。日本人も大学院生も含め十数名が在籍していると聞いた。

授業は、講義要綱から見る限り講義よりもテーマの絞られたゼミナールが大多数を占めている。講義は、教科書といわれるものを見たことがなく、パワーポイントでのプレゼンテーションが主体であった。もちろん、参考となる図書にはどのようなものがあるかについては紹介され、図書館で閲覧可能である。例えば、スポーツ医学分野の聖書的なHollmann und Hettinger の「Sportmedizin」は、図書館に100冊以上が陳列され圧巻であった。プレゼンテーションは、イラストや写真、動画がふんだんに利用され、理解が深められた。例えば、滑走説をアニメーションで表示されたときはその有益さを実感した。

印象に残るゼミナールの一つは、Dr.GrafとHerr Kochが担当していた、KiMo-Projekt (Kindergarten Mobil; 幼稚園児を活発に) と名づけられたプロジェクト研究関連のゼミナールである。これは研究所のプロジェクトのひとつである「CHILT ; Children's Health Interventional Trial」という児童青少年期の子供たちへの運動介入プロジェクトの一環ともいえる。学校体育の授業時間の少ないドイツでは、クラブに加入しない子供の肥満が問題になっている。その克服のために、栄養学的、スポーツ科学的にも介入をするものである。両親を含めて栄養学的な指導を行うとともに、運動教室を開催し、運動機会の提供と運動の必要性を訴えるものであった。



KiMoプロジェクト

もうひとつの特記すべきゼミナールは、私の受け入れ教官であるDr. Bjarnason-Wahrensが担当するスポーツ医学とリハビリテーションに関するゼミナールである。ゼミナールの一環として見学したリハビリテーション病院にはケルンスポーツ大学の卒業生が勤務し、運動指導を行っていた。特に印象に残ったのは、病院内に体育館やトレーニングルーム、スイミングプールがあったことである。わが国にも全くないわけではないが、その規模は比較にならないほど大きい。

このように、医療の世界にスポーツが積極的に関与するのは、国民の意識の現われでもある。スポーツが社会生活上とても身近なものとされているドイツでは、治療としてのスポーツ療法のほか、「予防」としてのスポーツ活動にも（条件はもちろんあるが）健康保険より金銭的な援助がなされているのには驚く。

3.ドイツ人の余暇とスポーツ

周知のように、ドイツでは「ゴールドプラン」によって、非常に多くのスポーツ施設がつくられている。現在、スポーツ施設は12万ヶ所を超え、我が国の日本体育協会に相当する「DSB(Deutscher Sport Bund)」には約2700万人（国民の約3割）が加入している。多くの人が仕事や学業の後スポーツクラブに行ったり、個人的に身体を動かしたりして余暇生活を楽しんでいる。その背景の一つは、国民がスポーツを好むからであるが、余暇時間が長いこともその一因であろう。

法律上は我が国同様週40時間の労働時間に抑えるよう定められているが、一般的にはそれより短い。例えば、フォルクスワーゲン社の労働時間は現在週33時間である。驚くことに一昨年の秋までは週28.8時間であったようだ。また、有給休暇は年間最低24日間、そのうち12日は連続しなければならないと法律で定められている。さらに病気のため欠勤しても6週までは病欠休暇として扱われ、有給休暇が減ることはない。さらに……、ある日残業しても、1日の平均労働時間数が8時間になるようその後の6週間で労働時間を清算しなくてはならない。そこでまた休日が生まれるのである。

ただし、世の中が動きだすのは朝早い。始業時間は8時のところが多いようで、16時が終業時刻になる。サマータイム実施中は夜9時過ぎに暗くなるので、終業後に十分な余暇時間が確保できる。福田直子氏の書かれた「休むために働くドイツ人、働くために休む日本人」のタイトルそのものを感じる。

帰国後こんな生活を紹介し、自ら実施したいと希望に満ちて帰国し1年以上が経過したが、理想と現実の差は大きい。一人でこれを実践すると単なる「怠け者」とレッテルを押されかねないので、皆さんと一緒にスポーツ活動の時間が確保される世の中を目指しませんか。



ケルンのカーニバル（郊外の村にて）

研究室訪問 I

コミュニティ運営実習について

山 本 達 三（愛知学泉大学 コミュニティ政策学部）

愛知学泉大学コミュニティ政策学部は、地域社会の諸問題を解決し、地域発展のため「自立・共生」の視点から政策型思考のできる人間像を理想とし、強固な意志力、逞しい想像力、無限の可能性を持つ人材の養成、潜在能力の発掘を目指して1998年に設立されました。学生は将来の活躍分野を考えて地方行政コース、環境・福祉・スポーツコース、地域・国際ボランティアコース、地域マネジメントコースの4つのコースのいずれかを選択し、身近な生活から地域社会、そしてインターネット社会まで様々な問題を解決するための理論と方法を学んでいきます。さらに、この4つのコースと同時に、公務員試験合格を目指す学生をバックアップするために学内に東京アカデミーによる公務員受験対策コースも設置しており、受験に対応する力を養成しています。今回の研究室訪問では、愛知学泉大学コミュニティ政策学部の基幹科目のコミュニティ運営実習を紹介したいと思います。

コミュニティ運営実習とは、市民や企業・自治体が活動する現場へ実際に赴き、コミュニティが抱える課題を発見し、解決するための方法を考え、実行するという実習です。これらの学習体験を通して、学生はより実践的な問題解決能力と行動力を身につけてくれることを期待しています。

筆者のコミュニティ運営実習では、地域スポーツ・レクリエーションの現場を実習先として選んでいます。2006年度春期は、岩倉市にあるNPO法人わくわく体験隊主催の「田んぼで遊ぼう!田植えしよう!」という子どもたちを対象にした田植え体験のイベントを共同で企画・実施・運営しました。当日のイベントでは集まった40人の子どもたちと一緒に水田に入り、田植え、泥遊びをしたほか、ドラム缶の風呂を薪で沸かした

りするなどの活動をサポートしました。続いて、夏休みにNPO法人、旅行会社、大学の三者がそれぞれの専門性を生かして「子どもたちだけで行くサバイバル体験!わくわく答志島ツアー」と題したツアーを企画・運営しました。当日は名古屋駅や岩倉市を出発し、鳥羽まではバスで向かい、鳥羽港から答志島へは船で渡り、現地到着後は子どもたちを中心にテント設営、薪拾い、火起こし、夕食づくり、肝試し、



（中日新聞尾張版7月20日朝刊に掲載）

などをサポートしました。あくまでも必要最小限の声かけに徹し、できるだけ子どもたちに主体的に活動させねばなりません。翌日は朝食、海釣り、昼食づくり、海水浴などをサポートしました。

2006年度秋期は、学泉大生を対象としたスキー・スノーボードツアーを企画しました。学生たちは、募集ポスター作成、参加者募集、要項作成、宿泊先・バス手配、レンタル集計、現地での日程調整、保険、集金などを実体験し、1年を通じてスポーツイベントの企画から運営までを経験し、その大変さを知り、同時にそれ以上の面白さを感じたようです。



（中日新聞尾張版6月20日朝刊掲載）



2007年度春期は、半田市成岩にある総合型地域スポーツクラブ、ソシオ成岩スポーツクラブを見学、理事長の榊原さんに、クラブ設立から現在までの経緯や苦労を熱心に聞いて、質問も活発にしていました。また、市民クラブ三河FC(フットボールクラブ)の少年サッカースクールにも参加、フットサルイベント企画、などをおこないました。この時期から、大学と市民クラブ(三河FC)との協働事業による大学の有するスポーツ資源を地域に開放していく、地域貢献事業を展開する必要性を学生たちが議論するようになります。運営実習生、三河FCスタッフ、学部教員を交え複数回にわたりミーティングをおこない、「地域には運動・スポーツに対する潜在的なニーズがあり、これらのニーズに応えるように大学のスポーツ資源を地域に開放して、庶民にスポーツ環境を提供していくことは重要である。特に、コミュニティを活性化させることを重要なポイントに据えながら、スポーツ環境の改善と地域の活性化を目指すことで、地域住民が抱える、運動不足や、体力向上、肥満軽減、青少年の育成、地域コミュニティづくり、メンタルヘルスの改善、などの貢献ができる」として意見がまとまり、学生たちと協働して「スポーツによる地域貢献事業計画書」を作成し、学園の法人本部に提出しました。

2008年度現在、「スポーツによる地域貢献事業計画書」に提案していた、市民クラブに三河FCに体育館のトレーナー業務を委託する契約を法人と締結する運びとなり、大学の地域貢献事業計画を進めていくための準備を着々と進めています。また、2008年はコミュニティ政策学部創

部10周年にあたり、その記念イベントとして「まちフェスタ in 三河」を夏に開催予定です。当日は、小中高生を対象に、某Jリーグ2チームのフィジカルコーチ2名による「短距離走のフォームやトレーニング方法」や「Jリーグのトレーニングやコンディショニング」、子どもたちのお母さんを対象にした「管理栄養士による「息子・娘がアスリートのお母さん集合!スポーツ青少年向け食育(お弁当作り)の極意」などをコミュニティ政策学部教員と学生が知恵を出しながら、企画中です。さらに、当日午後はフットサルイベントや、テニス教室、サッカー教室、バスケットボール教室、ディスクゴルフ教室、ダーツ教室なども企画中です。

今後は、コミュニティ運営実習と市民クラブやNPOと協働で、大学の施設を地域に開放していくとともに、



豊田市や三好町などの行政や地域のNPO法人、連携をはかりながら近隣地域のスポーツ環境の充実に貢献していきたいと考えています。

研究室訪問 II

選択科目「スポーツ」におけるフェンシング授業

新井 祐子(朝日大学 健康・スポーツ科学研究室)

1.朝日大学の概要

朝日大学は、国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人的知性に富む人間を育成することを建学の精神としている。

この建学の精神に基づいて、法学部(法学科)・経営学部(経営学科、情報管理学科、ビジネス企画学科)・歯学部(歯学科)の3学部5学科を開設している総合大学であり、総学生数は約2,100人である。

2.フェンシングの授業がはじまったきっかけ

法学部(法学科)・経営学部(経営学科、情報管理学

科、ビジネス企画学科)の2学部4学科の選択科目としてスポーツ。(前期)・スポーツ(後期)を開講している。そのスポーツの種目の1つとしてフェンシングを実施している。スポーツの種目の1つにフェンシングを取り入れることになったのは2003年度からである。前年度に体育会が発足し同時にフェンシング部が創部したため、専用施設や専門指導者が整ったことがきっかけとなった。またフェンシングは、道具を多く使用する特殊競技であり、どこの大学でも行っているわけではないため大学の独自性も追求でき、指導者もアトランタ・シドニーの2大会オリンピック出場経験もあることから高い専門性があるということ

で実施が可能となった。



【朝日大学フェンシング場 外観】



【朝日大学フェンシング場 室内】

3.体育会の概要

2002年度発足の朝日大学体育会は、発足以前から強化種目としてあった4種目（硬式野球、ラグビーフットボール、バレーボール、相撲）と発足と同時に創部した6種目（卓球、女子柔道、剣道、ホッケー、硬式庭球、フェンシング）の計10種目のクラブで構成された。その後2003年度に自転車競技、2008年度にハンドボールが追加し、現在12種目のクラブが活動している。

大学スポーツとして全国大会等で活躍するだけでなく、平成24年の岐阜国体に向けて岐阜県とも連携を図って活動もしている。

4.フェンシングの説明及びエペ種目について

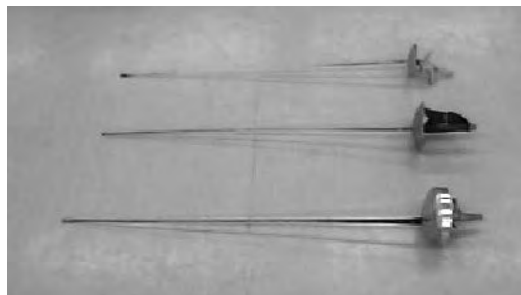
フェンシングとは中世の騎士道から伝わってきた剣術の事である。

Fencingの語源はFenceからきており「防御する・払いのける」や「身を守る・名誉を守る」などの意味を持っている。フェンシングは、第1回アテネオリンピック大会から正式種目として行なわれている伝統あるスポーツの1つでもある。

フェンシングは、縦14m×横1.5m～2mのピストと呼ばれるコート上で、2人の競技者が白いユニフォームを着てマスクをかぶり、利き手には剣を持ち、半身で中腰、利き手と利き足が前、非利き手と非利き足が後ろという

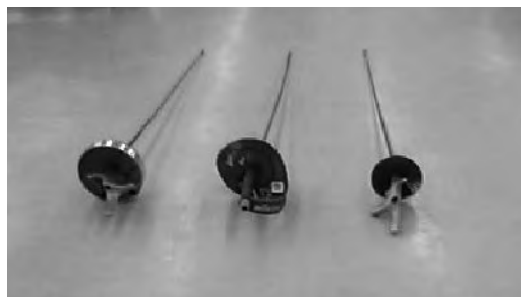
左右非対称の構えをして互いに向かい合い、相手を突いたり切ったりするスポーツである。

フェンシングには、突きのみで衿から下までで手足を除いた部分が有効のフルーレ、全身どこを突いても有効のエペ、斬りが主な攻撃手段で突きも併用で、有効面は上半身のサーブルの3種目があり、ルールの違いによってそれぞれ剣も異なる。



【フェンシング:3種目の剣①】

上:フルーレ剣 中:サーブル剣 下:エペ剣



【フェンシング:3種目の剣②】

左から エペ剣・サーブル剣・フルーレ剣

授業の種目としてはエペを行うこととした。この種目を選んだ理由は、全身どこを突いても有効となり、シンプルでルールも勝敗も分かりやすく、そればかりかプレーしたことがなくても勝てる可能性が少しでもある種目であるからだ。



【授業用フェンシング道具(エペ用)】

左横から:エペ剣・マスク・ボディーコード／左上:グローブ／中上:ユニフォーム上／中下:ユニフォーム下／右横:プロテクター／右下:胸パット／フルーレ・サーブルでは、上半身のみユニフォームの上からメタルジャケットという電器を通す金属製のものをもう一枚着る。

5.授業内容の説明

フェンシングの授業では、フェンシングを通して規律やルールを守りながら技術を習得し、試合の駆け引きや1点を取り合う緊張感、勝敗による喜びや悔しさを学び、体力の向上や健康増進を目的として行なっている。

受講学生は初心者や留学生、また、他種目の体育会学生やフェンシング経験者と様々である。授業は男子と女子を隔てずに行っているが、男女差や経験差がある時にはハンデをつくったりして誰もが楽しめるように考慮している。

授業展開が習熟度によっても若干異なるが、下記の項目を重要項目としている。

●道具の使用が多いため、安全面を徹底

●基本動作及び名称を覚える

○基本フォーム・動作

＜アン・ガルド(構えて)、マルシェ(前進)、ロンベ(後退)、アロンジェルブラ(腕を伸ばせ)、ファンデブー(突け)＞

●審判の号令や点数の付け方も覚える

○試合の号令

＜ラッサンブレ(気をつけ)、サリュエ(礼)、アン・ガルド(構えて)、プレ(準備はいいか)、アレ(試合はじめ)、アルト(止め)、トゥシェ(タッチ(英)、突き・斬り)＞

○点数の付け方

＜得点例＞ 1対3(ユヌ ザ トロア)、4対8(キャトル ザ ユイト)、2対2(ドゥ パートゥー)

○1～10までの数

＜1(ユヌ)、2(ドゥ)、3(トロア)、4(キャトル)、5(サンク)、6(シス)、7(セツ)、8(ユイト)、9(ヌフ)、10(デイス)＞

●突いたり突かれたりという体験やゲーム形式で楽しく、また個人戦だけでなく団体戦も取り入れチームワークを学ぶ

●ビデオを取り入れ、自分のフォームやプレーを確認したり世界レベルの試合を見たりしてフェンシングの理解を深める

●フェンシング道具の一部を半年間貸し出し、個人で管理させる(保管場所:フェンシング場)

6.受講学生について

アップ編: インディアカの羽つきのボールの蹴り合い(突きのため踏み込みの練習)やテニスボールでキャッチボール(突きの時の腕を伸ばす、剣を持つので手を使う練習)を技術の習得の意識がなく学生は楽しく行っている。

道具編: はじめはユニフォーム等の身に付ける道具の

着方や順序、剣の持ち方に戸惑い、また週1回の授業では次週までそれを覚えていないのが現状であった。

しかし、半期を終える頃には、短時間のユニフォーム等の着用や脱衣が可能となった。

構え編: 基本的なアン・ガルドとは、利き足が前足、非利き足が後足となり肩幅より少し広めに開脚し、半身で中腰の状態、前になる利き手には剣を持ち、後ろになる非利き手は胸より高い位置(ウェイターがトレイを運ぶのに似た格好)で構える。人の骨格や体形の違いもあるが、構えにはいくつかの特徴がみられる。利き足と非利き足の両膝が伸展したままの構え、非利き足のみの膝が伸展したままの構え、中腰であるが上半身が前傾し臀部が横や後ろに突き出ている構え(非利き足のみの膝が伸展したままの構えにも前傾はみられる)、上半身前面を相手に向けている構えなどがある。

また試合で初心者にみられるのが、上半身を両腕で隠そうとすることである。ボクシングの前傾し防御を固めた「クラウチング・スタイル」に似ている。

剣の使用編: 相手に突かれる時に、突かれないという自己防衛本能が働き、まだ知らないはずであるパレ(相手の剣を払うこと)を行うことがある。自分から突く時は、思い切り突くことができずやさしく押すだけになったり、逆に至近距離で思いつき突き過ぎたり、突き方が悪くて剣が逆に反ってしまうことがある。

用語編: 審判の号令や得点をフランス語で行うことを課題としているが、前期を終える頃にはユニフォーム等の着用や脱衣と同様、ほとんどの学生が自然と言える様になった。(今後は、審判のジェスチャーも行いたい)

試合の事例: 剣道部もしくは剣道経験者は、剣さばきや攻撃のタイミング(踏み込み)が、フェンシングに類似しており、はじめから上手に剣を使うことができる。ただ剣道の試合は、床が板張りで1辺9m～11mの正方形または長方形で行うことから、フェンシングの縦長のピスト(コート)で動く、左右に動き過ぎて試合が中断してしまうことが多々ある。

【お知らせ】

庶務委員会からのお知らせ

庶務委員長 高 石 鉄 雄
野 中 壽 子

1.東海体育学会の役員

氏 名	役 職	所属先名(日本体育学会登録先に準ず)
穂丸武臣	会 長	名古屋市立大学
藤井勝紀	理事長	愛知工業大学
池上久子	学 会	南山大学
池上康男	広 報	名古屋大学総合保健体育科学センター
大桑哲男	編 集	名古屋工業大学
岡本 敦	広報○	東海学園大学
春日晃章	学会○	岐阜大学教育学部
北川 薫	編 集	中京大学体育学部
小林培男	学会◎	日本福祉大学
桜井伸二	編 集	中京大学体育学部
庄司節子	企画○	名古屋経済大学
正美智子	編 集	名古屋学芸大学
高石鉄雄	庶 務	名古屋市立大学
坪田暢允	企 画	名古屋学院大学経済学部
鶴原清志	学 会	三重大学教育学部
寺田恭子	企 画	名古屋短期大学
富樫健二	広 報	三重大学教育学部
野中壽子	庶 務	名古屋市立大学
花井忠征	企画◎	中部大学
星川佳広	広 報	浜松ホトニクス(株)
森 勇示	編 集	愛知教育大学
山本 章	学 会	静岡大学教育学部
山本裕二	編集○	名古屋大学総合保健体育科学センター
吉田文久	編集◎	名古屋短期大学
來田享子	広報◎	中京大学体育学部
斉藤由美	監 事	名古屋造形大学
山本達三	監 事	愛知学泉大学
小栗和雄	幹 事	静岡産業大学経営学部

(◎委員長、○副委員長)

粕谷 陽佑(名古屋大学大学院)
鈴木 春智(名古屋大学大学院)
松本 実(中京大学)
卯田 一平(愛知大学)
田畑 昭秀(日本競輪学校)
中井 定(中京女子大学)
渡邊 航平(名古屋大学大学院)
金謙 樹(特殊スポーツ研究所)
伊藤 秀志((財)静岡総合研究機構)
加古 祥乃((株)あまの創健)
旭 隆裕(岐阜大学大学院)
浦野 忍(名古屋保育・福祉専門学校)
川田 裕樹(名古屋大学総合保健体育科学センター)
水野 貴正(中京大学大学院)
和所 泰史(中京大学大学院)
高村 秀史(日本福祉大学大学院)

※所属機関変更など

伊藤 智式(愛知学泉大学)
稲嶋 修一郎(名古屋大学総合保健体育科学センター)
稲垣 良介(可児市立蘇南中学校)
植屋 節子(健康運動企画)
内田 智子(中京女子大学短期大学部)
岡本 敦(東海学園大学)
大嶋 正孝(加藤学園暁秀中・高校)
加藤 貴英(豊田工業高等専門学校)
杉浦 義信(新居町立新居小学校)
鈴木 宰(御殿場市立原里中学校)
長谷川 憲一
長谷川 望(愛知東邦大学)
森 悟(東海学園大学)
吉田 正(愛知学泉短期大学)
三浦 雅季(愛知健康プラザ)

※転入会員

平川 武仁(南山大学人文学部)
神谷 拓(岐阜経済大学)
村上 佳司(浜松大学)
森谷 友一朗((株)ヒマラヤ)

2.会員の消息(平成20年5月19日現在)

※新入・所属等変更の会員

荒賀 博志(名古屋障害者スポーツセンター)
渡部 琢也(愛知新城大谷大学)
白石 裕一(日本競輪学校)
森下 義隆(岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター)
鈴木 啓央(名古屋大学総合保健体育科学センター)
周 強(中京大学大学院 体育学研究科)
佐藤 丈能(中京女子大学短期大学部)

大隈 節子（三重大学教育学部）
中山 健（富士常葉大学総合経営学部）
井本 岳秋（静岡県総合健康センター）
松田 繁樹（岐阜聖徳学園大学短期大学部）
光岡 かおり（中京女子大学健康科学部健康スポーツ科学科）
三岳 秀鳳（静岡福祉大学）（旧姓名 楠本 貴彦）

※転出会員

村井 剛（日本大学）
高橋 義雄（筑波大学）
安達 隆博（九州産業大学健康・スポーツ科学センター）
沢井 史穂（女子美術大学）
西田 円（天理大学体育学部）（旧姓 安永）
幸 篤武（鹿屋体育大学大学院体育学研究科）
吉田 勝光（松本大学人間健康学部）

※退会

小野 隆
峯村 昭三
池田 隆二
伊藤 実知子
大石 寿明
大島 等
岡戸 文一
小粥 由美子
梶岡 多恵子
金子 智隆
下田 次雄
鈴木 正之
高橋 結香
中馬 健太郎
塚田 直和
日比野 義和
宮田 尚美
劉 樸

3. 東海体育学会HPの移転

平成20年3月より東海体育学会のHPをリニューアルし、
<http://www.tspe.jp/> へ移転しました。学会大会を始め、講演会、学会誌投稿規定など当学会に関する様々な情報を掲載しておりますので積極的にご利用ください。

4. 日本体育学会への登録・訂正等

日本体育学会会員の方は名簿に訂正箇所がありま

したら、学会員名簿や体育学研究の折り込みの用紙を利用して、日本体育学会に訂正依頼をお願いいたします。

東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会事務局（上記HPに案内有）にお知らせください。

5. 学会費の納入

日本体育学会会員の方は、預金口座振替による自動振込をご利用頂きたくお願いいたします。自動振込の申請用紙が必要な方は東海体育学会事務局にご請求ください。東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会の郵便振替口座に年会費3,500円を納入ください。

6. 東海体育学会事務局

東海体育学会事務局の電話番号とFAX番号が変更されました。FAX利用の際は、「東海体育学会事務局宛」であることを明記してください。また可能な限りEメールや郵便を利用するようにお願いいたします。

東海体育学会に対するご意見、ご希望等ありましたら、以下の事務局にご連絡ください。

〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1

名古屋市立大学内 東海体育学会事務局

TEL/FAX 052-872-5839

E-mail:tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

東海体育学会 郵便振替口座番号:00870-8-41336

編集後記

今年度の会報をお手元にお届けいたします。各種委員会報告については、理事任期が終了した先生方にお手数をおかけして、原稿を頂戴いたしました。ありがとうございました。今号の国際情報のページには、在外研究期間の生活の様子を米国、ドイツについて、お二人の先生からお寄せいただきました。また、研究室訪問のページには、地域と連携した授業実践報告を1件、他大学ではなかなか経験することができない競技を教養科目の一つとして実践されている授業報告を1件、お寄せいただきました。国際情報、研究室訪問のどの記事も、日々の忙しさに追われる気持ちを紛らわせるだけでなく、明日からの精進や授業での創意工夫への熱意を高めてくれる記事です。お忙しい中、ご寄稿いただいた先生方に、感謝いたします。

企画委員会による講演会、学会大会など、本学会の行事については、ホームページでできるだけ早くお知らせするとともに、会報として紙面でお伝えすることにより、多くの会員に情報が伝達され、また興味をお持ちの方にお知らせいただけることを目指しています。

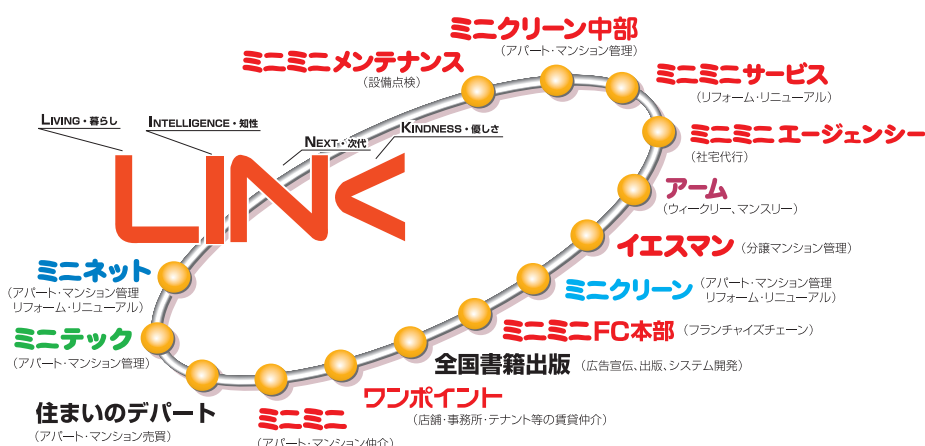
刺激に満ちた企画がなされていますので、多くの会員のみなさまのご参加をお待ちしています。

次号以降も会員の皆様の様々な情報を掲載したいと考えておりますので、ぜひ積極的に情報をご提供いただきますようお願いいたします。最後に、本会報は株式会社ミニミニのご支援をいただきまして発行することができました。お礼申し上げます。

広報委員会委員長 来田 享子

東海体育学会会報 No. 81

発行日 2008年6月20日 発行 東海体育学会 編集 広報委員会
事務局 〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1 名古屋市立大学内
TEL/FAX 052-872-5839
E-mail tspe@htc.nagoya-u.ac.jp
ホームページ <http://www.tspe.jp>



次世代へ知性と 優しさのある暮らし

万全の集客体制・集客力でバックアップ

ミニミニは「明るく健全な店づくり」をモットーに、お客様が来店しやすい店づくりを心がけています。そして、お馴染みの敷金・礼金0物件に加え、仲介手数料が家賃の52.5%で、家具家電製品付きのお部屋をご用意するなど、常にお客様のニーズを考えてお部屋探しのご提案をしています。

トータルサポートシステム

多様化するライフステージをトータルにサポート致します。

全国に広がるミニミニネットワーク

賃貸ニーズを的確にとらえ、全国に500店舗、FC500店舗を目指しております。

ミニミニ独自のスポーツ推薦採用制度

ミニミニグループ(株式会社ミニミニを中心にグループ14社)では、来年度新卒採用に際して、各大学・短大体育会系クラブ所属の学生を採用基準に限定したスポーツ推薦入社制度(一般募集・採用新規社員とは別枠)を実施致します。おかげさまで今年度も、スポーツ推薦入社制度により多数の各大学チームよりミニミニグループ各社にスポーツ推薦新入社員として入社いただく事となりました。ご推薦いただきました各チーム監督ならびに大学関係者の方々には心より御礼申し上げます。

現在、アパート・マンションの仲介を行う「**ミニミニ**」及び
アパート・マンションの総合管理を行う「**ミニテック**」で
スポーツ推薦入社制度による2009年度新卒者を募集しています。



最新のお部屋
情報満載!!

お部屋探しは

ミニミニ

検索

mini mini minitech

株式会社ミニミニ 中部本部 TEL (052) 971-0032 株式会社ミニテック 中部本部 TEL (052) 971-0087

